第Ⅳ部門　　京都の庭園における山の眺望に関する研究

京都大学工学部　学生員　○水谷　壮志
京都大学大学院工学研究科　正会員　樋口　忠彦
京都大学大学院工学研究科　正会員　川崎　雅史
京都大学大学院工学研究科　正会員　出村　嘉史

1　はじめに

京都には古くから山を眺望対象とする庭園が数多く存在していた．現在，そのような庭園はひとえに「借景庭園」と呼ばれているが，その定義は曖昧なものとなっている．その結果，「借景庭園」の景観保全に際しての具体的・統一的な方策が得られていない現状にある．本研究ではこの現状を踏まえ，「借景庭園」を，視点場の位置と山の眺望との関係を指標として類型化することを目的とする．

2　庭園からの眺望景観

庭園からの山の眺望は，古くより数々の文学や絵画のモチーフとなっており，その眺望景観に何らかの「意味づけ」がなされている事例が数多く存在する．この「意味づけ」の起こる要因は，庭園という「場」のもつイメージから生じる見る者の心理的な要因と，実際に眺める山の形の美しさといった視覚的な要因が考えられる．本研究では，この「視覚的な要因」に着目し，庭園から眺める山の形姿を考察する．この山の形姿の輪郭を構成する「山の稜線」は，視線入射角が 0 度になる点の集合である．そして，山のピークや稜線，山肌の見え方は，視点と山の相対的な位置関係によって何通りにも存在しうる．

そこで，庭園の周りに複数の視点を設定して，それらの視点からの山の眺望と，庭園からの山の眺望との類似性や変化の具合を分析する．すなわち，対象とする庭園の，山を望む視点場としての立地の固有性を比較検証することにより，庭園の類型化が可能ではないかと考える．

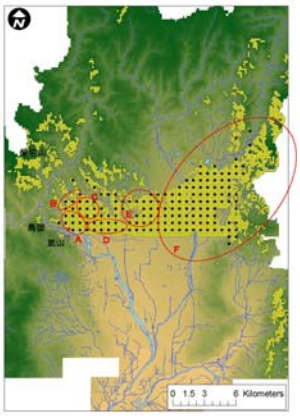
3　ケーススタディ（天龍寺庭園―嵐山，渉成園庭園―清水山）

ここでは，天龍寺庭園からの嵐山の眺望と，渉成園庭園からの清水山の眺望を取り上げる．

3.1　天龍寺庭園

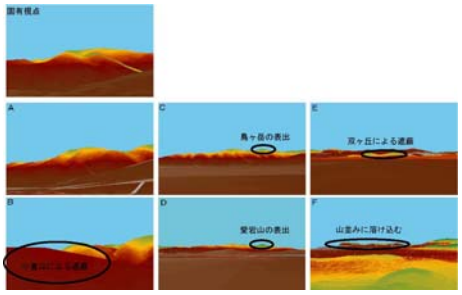
天龍寺庭園の周辺は，平安期以降詩歌の題材が多くこの地に求められるほどの景勝の地であり，周囲は地形変化に富んでいる．

そこで嵐山を望むことの出来る，京都市内の複数の視点位置からの透視形態を全て表示した結果，図－１のような地域別の山の形態区分が可能となった．



図―１

各観測地域からの山の形態を図―２で解説する．Ａ地域では，天龍寺庭園からの嵐山の眺望と同等の形態が得られる．Ｂ地域では，嵐山の北東にある小倉山が近景として視界に入り，嵐山の大部分が遮蔽される．Ｃ地域では，嵐山の北西に隣接する鳥ヶ岳（398m）の稜線が嵐山の稜線と連なって見え，嵐山の形態が知覚されにくくなる．Ｄ地域では，視界が広がることによって，北部の北嵯峨にそびえる愛宕山（890m）の稜線が強調される．Ｅ地域においては，双ヶ丘が視界に入り，嵐山の形態の一部分または大部分が遮蔽される．Ｆ地域は，視点と眺望対象との距離の関係上，嵐山一帯と西山一帯の稜線が溶け込み合い，扁平化されてしまう．

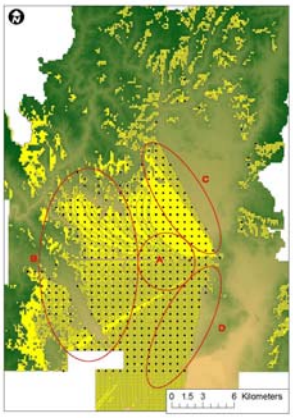


図－２

Takeshi MIZUTANI, Tadahiko HIGUCHI, Masashi KAWASAKI, Yoshifumi DEMURA

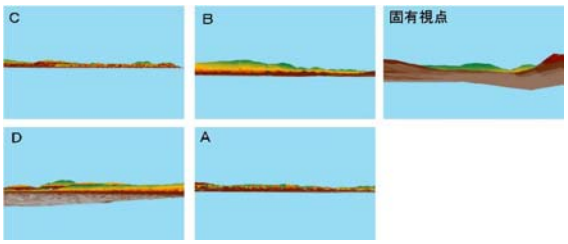
3.2　　渉成園庭園

涉成園には作庭当時，東山連峰を観賞するための施設が設けられるなど，東山への眺望意識が存在していた．現在においても，庭園から望む東山の眺望が必要不可欠な景観要素とされ，庭園が管理されている．現状では，庭園の植栽越しに清水山を眺めることが出来るので，これを眺望対象とした．庭園は河原町六条の都心地域に立地しており，周囲の微地形は平坦である．



図－３

清水山を捉えることのできる京都市内の複数の視点位置からの透視形態を検証した結果，**図－４**に示すような四種類に分類されることが明らかとなった．Ａ地域では，渉成園と同等の清水山の形態を望むことが出来る．Ｂ地域では，Ａ地域よりも清水山の稜線が突出し，清水山の形態がより強調されている．この形態の強調性によって，Ｂ地域は遥か遠方にまで広がっている．逆にＣ地域では，固有視点と同等の清水山の形状は望めるものの，眺望対象との距離が広がっていることで，稜線が東山の山並みに溶け込んでしまっている．Ｄ地域では，清水山の背後に東山一帯の山，特に比叡山の稜線が重なり，形態の把握が困難となっている．

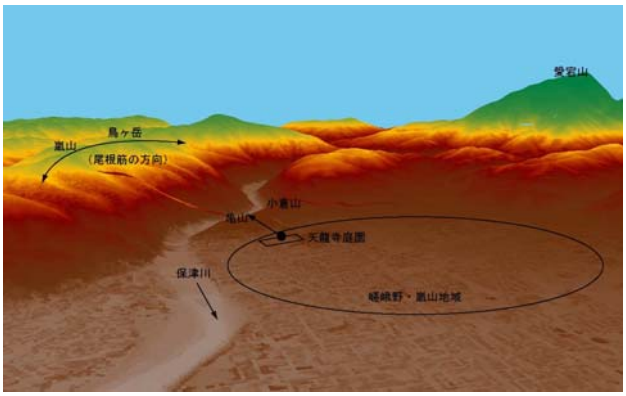


図―４

4　　両者の考察と比較

嵐山の眺望を得る天龍寺庭園のもつ固有性は，視界に占める眺望対象の割合の高さ，周囲の山との重なりによる眺望対象の稜線の変形，といった要素によって成り立っていることが分かった．特に，眺望対象である嵐山は，隣接する鳥ヶ岳と一連の尾根筋をなしており，尾根筋の方向は天龍寺庭園からの視線とほぼ直交している．これにより，天龍寺庭園からの嵐山の形姿と類似した眺望を得る視点は，庭園の北東部に限られていることが分かる（**図―５**）．一方，清水山の眺望を得る渉成園庭園のもつ固有性は，周囲の山との重なりによる周囲の山への溶け込みや，眺望対象を眺める方向による形状の変化，によって成り立っているといえる．しかし，これら両者の山の形状変化の度合いを比較すると，天龍寺庭園に比べ，渉成園庭園のもつ視点場の固有性は小さいことが推察される．これは，対象となる山を眺めることができる視点の取りうる範囲を，**図―１**と**図―３**で比較してみるとより明らかである．

以上の考察より，天龍寺庭園は渉成園庭園よりも範囲が限定された山の眺望景観を有しており，視点場としての固有性が高いことが分かった．



図－５

5　　おわりに

今回，京都の山の眺望について，「借景庭園」という視点場がもつ固有性を，透視図的に見た山の形姿と視点位置の広がりを指標として考察した．しかし明瞭な評価基準をもって「借景庭園」を類型化するには至らなかったので，そこを今後の研究課題とする．

参考文献

阿部万紀子・久野紀光・斉藤　潮，都市縁辺部における地形透視像とその固有視点について，日本都市計画学会学術研究論文集，2001

重森三玲・重森完途，日本庭園史体系，社会思想社，1973